

幼児の声の技能を引き出す歌唱実践の試み：
静岡大学教育学部附属幼稚園における実践の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 志民, 一成, 石川, 眞佐江, 中村, かおり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006498

幼児の声の技能を引き出す歌唱実践の試み

静岡大学教育学部附属幼稚園における実践の検討

The Attempt at Vocal Teaching Activities to Bring out Young Children's Vocal Skills

A Case Study of the Activities in the Attached Kindergarten

志 民 一 成 石 川 眞 佐 江 中 村 か お り

Kazunari SHITAMI, Masae ISHIKAWA, Kaori NAKAMURA

（平成23年10月6日受理）

はじめに

今川と志民（2004他）は、幼稚園等でのフィールドワークを通して、幼児が日常の園生活や遊びなどの中で、裏声を含めたさまざまな声を用いて表現していることを明らかにしてきた¹⁾。そして、そのような子どもが見せる多彩な声の表現は、高度な声のコントロール技能によって実現されており、これらの技能の発動には、「他者との関係性」「イメージの喚起」「身体性」²⁾が関わっていることを見いだした。幼児期の教育において考慮すべきことは、このような子どもならではの能力の発動の特性を十分に踏まえること、そして、遊びを中心とした生活を通じた体験の重なりが、子どもの能力の育ちにつながっていくという視点を持つことであると考え

る。そこで我々は、子どもがすでに生活の中で発揮している声の能力を引き出し、歌唱において生かしていけるようになるための、有効なはたらきかけを模索することにした。その主軸となるのは、子どもの声の能力、中でも裏声を出す技能を引き出すためのオリジナル教材の開発である。子どもがすでに持っている裏声の能力にはたらきかけ、その技能を歌唱の際の高音域の発声に結びつけるためのきっかけとなる教材を開発し、その有効性を検証することが、これまで行なってきた一連の研究の主たる目的である。

換言すれば、生活の中で培われつつある声の能力を最大限に引き出し、継続して刺激していくことで、歌唱という表現形態における技能への適応を促そうというのが我々のスタンスである。このような、生活における経験に根ざした子どもの表現力の伸長が、この研究の目的であるが、その成果としての教材や指導法はもちろんのこと、「子どもの声をいかに育てるのか」という理念も含めて、保育の現場、そして音楽教育の関係者に提案を行なっていきたいと考えている。

本稿では、幼稚園で実際に行なった歌唱活動を検討し、子どもの声の技能を引き出し刺激する上で、どのようなはたらきかけが有効であるかということについて示唆を得ることが目的である。静岡大学教育学部附属幼稚園において、子ども達の声の技能、とりわけ裏声を引き出すためにはたらきかけと、そのために開発した教材の試行を交えて、歌唱実践を実施した。その実践の記録を分析し、子どもが裏声を出している事例を抽出し、裏声を出すに至る文脈や背景、実践者との関係性を検討していくことにする。

1 実践の目的と概要

1.1 実践の目的

歌唱において高音域を歌うためには、音声生理学的に「軽い声light」に位置づけられる、いわゆる「裏声」を用いることが不可欠となる³⁾。そのためには裏声を用いたり、表声と使い分けたりしながら歌うという技能（換声）が必要となってくる。前述の通り、子どもはすでに日常生活や遊びの中で、裏声をはじめとした様々な声を用いて自在に表現しており、そういった声のコントロール技能を生活や遊びの中で獲得しているのである。このような子どもの遊びの中に見られるような、イメージにもとづいて裏声を導き出すといった技能を生かし、子どもの表現したい、という意欲にはたらきかけ、想像力や感性を刺激しつつ、歌唱における声のコントロール技能の発達を促す教材を、我々はこれまで開発してきた。

その教材の有効性を確認すること、そして子どもがすでに有している声の能力を、いかに引き出し刺激し続けていくかということについて、実践を通して示唆を得ることが本実践の目的である。つまり、子どもの声の技能を引き出し、歌唱の技能へと結び付けていくことをねらいとした、保育における「子どもの声」を包括的に育てるためのはたらきかけについて、実践的に検証することがねらいである。

なお、本研究は子どもがすでに持っている声の能力を刺激し、それを十分に引き出し伸ばしていくという目的で行っているものであり、発声技能を習得させるための指導を、就学前から行うことを提唱しているものではない。

1.2 実践の概要

静岡大学教育学部附属幼稚園の3歳児クラスで、教材を用いた歌唱活動を開始し、4歳児クラスになってからも引き続き実践を行なった。実践は、3歳児クラスで2008年9月30日、10月14日、10月21日、2009年2月17日、2月24日の5回、4歳児クラスで2009年9月9日、9月16日、9月24日、11月24日、12月8日、12月15日、2010年1月26日、2月9日、2月22日の9回、計14回実施した。毎回、教材開発に当たった志民と、石川、中村の3人が園に出向き指導した。

3歳児クラスでは、ブームワッカーや針金電話（写真）⁴⁾等を用いるなどしながら、歌う活動よりも「声で遊び、かかわる」ということを主眼として実践を行なった。また4歳児クラスでは、幼稚園の協力で、部屋のアップライト・ピアノが置いてある一辺を「歌のコーナー」として設定することができたため、ピアノやウクレレで伴奏しながら歌う活動も積極的に行なった。

実践に先立って、子ども達には歌うなどの音楽の活動をするということのみ伝えてあり、研究の目的については話していないため、我々が裏声を引き出そうというねらいを持っていることは、子ども達に直接知らせてあるわけではない。

実践の様子は、ビデオカメラと小型デジタルオーディオレコーダーで記録するとともに、並行してフィールドメモを取り分析を行なった。



図1 針金電話

2 遊びの場面における事例の検討と考察

2.1 事例の検討

ここでは、まず遊びの場面で裏声を用いていた事例を抽出し、子どもの声の様相と実践者のはたらきかけについて検討していく。なお、実践者はS（志民）、I（石川）、N（中村）、4歳児クラスの担任教諭をYと略す。

2.1.1 子どもの自発的な裏声

【事例1】 2009年9月16日（4歳児クラス）

男児が紙を丸めて棒状にしたものを銃か剣のようにして手に持ち、「ウー」（下線部は裏声。以下同じ）などと声を出しながら走り回る。時々、実践者Nのところに来て、銃を撃つジェスチャーをしながら「ウー」「バビューン」「パシュン」などと声を出す。特に「ウー」という声で表声と裏声を行き来する。それに対して実践者Nはリアクションしたり、「パーン」とやり返したりしている。やがて近くにいた女児Aと女児KHも一緒になって始める。

【事例2】 2009年12月8日（4歳児クラス）

女児Mと女児KHが犬の鳴き声をしながら、部屋のあちこちを走り回っている。2人とも裏声。しばらく続く。

これらの事例では、いずれも子ども達が遊びの中で裏声を用いている。共通する特徴は、擬音語・擬声語の部分で裏声になっている点である。動物の鳴き声や物音など、既存の体験、知識の中にある音声を再現、模倣する時にはしばしば裏声がみられる。事例1では銃を撃つ時の音を表現していると思われるさまざまな擬音語を用いているが、特に「ウー」という音の時に裏声が多くみられた。遊びの場面では、「犬の鳴き声」や「銃を撃つ時の音」など、表現したい音声についての具体的なイメージの中で、子ども達がそれに相応しい声を選び、駆使している様子が見てとれる。

2.1.2 実践者による子どもの声の模倣

【事例3】 2010年2月9日（4歳児クラス）

「たこたこチュー」と言いながら子どもが実践者Sに近寄ってくる。Sが同じように言い返すと、子どもも笑ってまた返し、何度も言い合っている。「チュー」の部分で裏声を使っている。何度も繰り返すうちに、「チュー」の部分がより強調されるようになってくる。

このような一見意味のなさそうな言葉を組み合わせる子ども達が面白い場面は、遊びの中ではよく見られる。上記の事例では、いずれも実践者Sが子どもの言葉を同じように言い返したことで、言葉遊びが続いた例である。実践者が子どもの音声の特徴をとらえ、抑揚も含めて模倣することで、子どもはなにげなく発した自分の声の特徴や面白さを意識化することができる。また、普段なら大人には忌避されるようなナンセンスな言葉でも、面白がって同じように返してくれる人がいることで、さらにかさねて表現しようとし、言葉遊びの継続につながっていった例である。

2.1.3 子どもによる実践者の声の模倣

【事例4】 2009年2月17日（3歳児クラス）

実践者Sが「真似してみて」と言い、男児F、K、女児M、R Iと向かい合って声あそびをする。「ホニョホニョホニョ」「ブー」「ウオウオウ」「ホニホニホニ」「ドゥー」「ホホホホホ」など、どの言葉も高音域で発声していた。この時の声遊びのやりとりは、4人共裏声であった。

事例4は、実践者が製作した、針金電話（図1）を幼稚園に持参して遊んだ後の場面である。子どもたちが声遊びの中で実践者Sの模倣をしている様子がわかる。特定の意味を持たない言葉を使用することによって、子どもたちは喋るための言葉という意識から離れることができ、言葉のもつ音そのものの響きを楽しむ声遊びに発展していつている。

【事例5】 2010年2月22日（4歳児クラス）

実践者Sが子ども達に動物の鳴きまねをせがまれて、猿やきりん、ぞう、ゴリラなどいろいろな動物の鳴きまねをしている。特に猿の真似で「ウキウキキキ！」とやると子ども達は大笑いで、Sは繰り返し何度もやる。しばらくしてから、女児KがSの膝で前回りをしながら「ウキキキキ（回る時）…フウウウ！（着地の時）」と高い裏声を出す。

実践者Sによる鳴きまね遊びの時には、女児Kはそれを模倣したりすることはなく、笑って何度も同じことをやるようにSにせがんでいただけであり、その少し後で、Kの裏声が発現した。この時のKの声は、直接的に猿の鳴きまねをしたり、Sの模倣をしたりしたわけではないが、直前まで聞いていたSの声の様相が影響を与えていると見ることができるだろう。また、KはSに両手を持ってもらい、Sの膝で前回りをしながら裏声を出していた。回る時と着地の時で異なる音声を発しており、身体感覚の変化に伴って声が発せられていることがわかる。

2.1.4 モノを介したはたらきかけ

【事例6】 2008年9月30日（3歳児クラス）

子どもたちが広告を丸めて棒状にし、剣に見立てて遊んでいる。その先端や中腹にスズランテープを貼り、テープをひらひらさせるように動かしている。実践者Sはそのビニールのひもを口にあて、カズーのようにして裏声で「ロロロロロ…」と声を出す。そこで遊んでいた男児Rも、Sと同じようにビニールのひもを口にあてて低い声で「ウー」と言葉を発する。女児たちも同様に声を出す。Rは別の場所に行くが、しばらくして再びSの近くにやってくる。先ほどのようにビニールひもを口にあて、裏声で「フーフー」と声を出した。それにこたえて、SはRの模倣をして「フッフッフー」と声を出した。

【事例7】 2008年10月14日（3歳児クラス）

数人の男児たちと実践者Sが、レインスティックやエコーマイク、ブームワッカーを手に取り、音を出している。やがて、男児たちがブームワッカーの先端に口をあて、表声で「ワー」と声を出しはじめる。そこへ男児Rがやってきて、「ボクもやる」と言ってSとブームワッカーの先端に口をあてて「アオー」と言い合う。Rの3度目の「アオー」はSより高い音域の裏声を用いていた。

事例6と7は、実践者とのやりとりの中で、はじめは低い音域で声を出していたRが、実践者の模倣をして裏声を用いるようになった事例である。実践者Sの声に対し、力任せに声を出す子どもが多かった。男児Rは、はじめは低い音域でSの声に反応していたが、やりとりを繰り返すうちに裏声に変化していった。

事例8は、事例4で用いた針金電話を使ってRと実践者Nが声遊びをしている様子である。針金電話はエコーマイクのように声がよく響くため、園児たちの興味を惹いた。さらに、電話を揺らすと針金が周りの筒に当たって「ビョンビョン」と音がするので、その音も楽しんでいったようである。

【事例8】 2009年2月24日（3歳児クラス）

男児Rと実践者Nが針金電話を持って声遊びをしていて、実践者Sはその様子を隣で見ている。Nが「Rくーん」と呼びかけた後、お互いが針金電話に耳をあて、残音を聴いている。Rが黙ったままなので、SとNが再び「Rくーん」と呼びかけると、Rは「ねえ、しゃべらないで」と言い、針金電話を伝って聞こえてくる音を楽しんでいる様子であった。RとNはその音に耳を傾ける。少ししてNが針金電話を揺らすと、Rも同じようにする。そして、Nが「Rくーん」と呼びかけるとRも裏声で「Rくーん」とこたえる。2、3度そのやりとりが続き、Nが「Rくーん」と呼びかけると、Rはその声に驚いたように針金電話から耳を離す。それから、耳を近づけてはNの声に反応して耳を離し、Nと同じように「Rくーん」と自分でも呼びかけをする。

子どもの興味を惹くような手作りの音具を用いたことにより、普段聞いている自分や他人の声が違って聴こえることで、子ども達の中に音や声への意識が高まったといえる。子どもにとってまだ「楽器」というカテゴリに分類されていない目新しい音具や、日常生活の中にあるモノを用いたことで、それらのモノと子ども達が多面的にかかわることができたと考えられる。ひとつのモノに対して、さわったり、聴いたり、叩いたり、見たり、人とやりとりしたりと、さまざまなかわり方を通して探索していく中で、モノを介した声遊びに発展した例である。

実践者の出す声に反応し、それを自分の身体で再現するためには、まずその声をよく聴いていることが必要となる。事例8の男児Rは、針金電話に耳を当て、耳をすまして実践者と自分の声、針金の音をじっくりと聴いている様子であった。このように、普段の遊びの中でも音や声に耳を傾ける経験を積み重ねることで、実践者の声に瞬時に反応し、再現できるようになるのではないかと考えられる。

2.2 考察：遊びの場面におけるはたらきかけとその意義

事例から読み取れるように、子ども達は遊びの場面ではしばしば自発的に裏声を駆使してい

る。それには、動物の声や効果音の表現など、具体的なイメージと結びついて発現するもの、子どもならではの言葉の組み合わせによる言葉遊び、身体感覚との連動によって偶然に生み出されたものなど、さまざまな状況が考えられる。

こういった遊びの場面での子どもの音声表現においては、子どもは必ずしも音声を表現することを第一義にしているとは限らない。そこで、子どもの声を受け止めてその特徴をとらえ、模倣して返したり、やり取りに発展させたりする大人がいることで、子どもは自分の出した声を客観的に確認し、意識化することができる。そして改めて、子ども自身が自分の声の特徴や、声で表現することの面白さに気づくことができる。

また、事例からは、実践者の声を模倣することで、子ども達が裏声を自然に発している例が多くみられた。他人の出している声を聴き、再現する時には、その声の音声的な特徴をとらえ、それを発するための身体感覚を自分の体で再現する必要があるが、面白い声や言葉の響きには子ども達は興味を持ってすぐに反応し、模倣することができていた。子どもの多様な声を遊びの中で引き出すためには、まず大人の側が多彩な声を使い、声で遊ぶという感覚をもっていることが有効であろう。

3 歌唱の場面における事例の検討と考察

3.1 事例の検討

次に本章では、開発した裏声教材や、裏声を引き出すことをねらった歌と、それ以外の子ども達が普段歌っている童謡・唱歌やアニメソングなどと比較しながら、それぞれ子どもがどのような声で歌っているかに焦点化して検討していく。

なお、開発した裏声教材としては、《かえるのぴよんた》(中村かおり作詞/広木良行作曲)、《ふみきり》(石川きんえつ作詞/広木良行作曲)、《こおろぎざん》(田辺幹人作詞/広木良行作曲)、《ロープウェイ》(悠木一政作詞/広木良行作曲)、《スリッパリッパ》(土生要作詞/広木良行作曲)を使用した。

3.1.1 既成の楽曲の歌唱

【事例9】 2009年9月9日 (4歳児クラス)

年中組になってからの初めての実践の日。普段の環境と違うので、子どもも落ち着かない様子。実践者が伴奏に使うため持ち込んだウクレレにも、子ども達は大変興味を示し、調弦ペグをいじりたがるので、実践者はウクレレを弾くこともままならない。また、ピアノの近くに活動コーナーを設定したので、子どもが入れ替わり立ち替わりやって来ては、思い思いにピアノを鳴らす。

Y先生に促され、午前中の最後の5分間のみ、子ども達が良く知っていると言う《こおろぎ》(関根栄一作詞/芥川也寸志作曲)、《とんぼのめがね》(額賀誠志作詞/平井康三郎作曲)などをピアノ伴奏で実践者3名が歌うと、数人の子どもも一緒に歌うが、子ども達は皆、表声で歌う。

【事例10】 2009年9月16日（4歳児クラス）

実践者が《ホ！ホ！ホ！》（伊藤アキラ作詞／越部信義作曲）、《たなばたさま》（権藤はなよ・林柳波作詞／下総皖一作曲）などを歌うが、ピアノの周りにいる女兒A達数名の女兒がウクレレの調弦をいじって遊んだり、ピアノでトーン・クラスターをしたりなど、無闇に音を出すことを続ける。その後も《とんでったバナナ》（片岡輝作詞／桜井順作曲）、《おばけなんてないさ》（横みのり作詞／峯陽作曲）、《おつかいありさん》（関根栄一作詞／團伊玖磨作曲）、《ぞうさん》（まどみちお作詞／團伊玖磨作曲）、《ちょうちょう》（野村秋足作詞／スペイン民謡）、などをピアノ伴奏で歌う。いずれも歌唱の声は表声である。

このように子どもが普段歌っている歌を、ある程度的人数で一斉歌唱する場合、これらの事例で聞かれたような「表声」を主体にして歌うことが自然であろう。楽曲によって、また楽曲中で声が大きく変わることは、ほとんど無い。

3.1.2 裏声を引き出す歌唱教材を歌った事例

このような状況に変化が見られたのは、年中クラスでの3回目の実践である。

【事例11】 2009年9月24日（4歳児クラス）

Y先生の声掛けで6人ほどがコーナーの椅子に座り、一斉歌唱活動が始まる。まず実践者のウクレレ伴奏で、実践者Nと子どもが交互唱する形で《やまびごっこ》（おうちやすゆき作詞／若月明人作曲）とその裏声バージョンを歌う。裏声バージョン（楽譜1）では、子どもの裏声や笛声が聞こえる。ここで女兒Kがやって来て、立ったまま歌に参加する（Kは、この日までこのコーナーに顔を見せることはほとんどなかった）。その後《とんぼのめがね》を歌うが、ここでは皆、表声で歌う。続いて、《こぶたぬきつねこ》（山本直純作詞・作曲）を歌う。子ども達はほとんど表声で歌うが、ネコの鳴き声「♪にゃーお」をSが裏声で歌うと、子ども達の何人か（Kを含む）は同じ部分を裏声や笛声で歌っている。

楽譜1 やまびごっこ

作詞：おうちやすゆき 作曲：若月明人

オリジナル

裏声バージョン

ここでは裏声を引き出すことをねらいとして、《やまびごっこ》と《こぶたぬきつねこ》という2曲の楽曲を使用しているが、いずれも子どもから裏声が聞かれた。ここまで歌唱場で、子ども達が裏声を用いて歌うことは無かった。

なお、この時初めて歌のコーナーに一定の時間滞在した女兒Kは、これ以後、実践者が幼稚

園に訪れるたびに必ずこの場所に来て、実践者と歌うなどの活動をするようになった。以下、このKを中心に見ていくことにしたい。

【事例12】 2009年11月24日（4歳児クラス）

ピアノの近くに6～8人女児が集まり、実践者のピアノとウクレレの伴奏に合わせて《南の島のハメハメハ大王》（伊藤アキラ作詞／森田公一作曲）を歌う。女児Kはウクレレを弾く仕草をしながら歌ったり、踊りながら歌ったりするが、この時のKの声は表声である。次に《こぶたきつねこ》を歌うが、1回目「♪にゃーお」の部分でKが裏声を出している。その後、Kのリクエストで《うたえバンバン》（阪田寛夫作詞／山本直純作曲）、《七つの子》（野口雨情作詞／本居長世作曲）、《きのこ》（まどみちお作詞／くらかけ昭二作曲）、《崖の上のポニョ》（近藤勝也作詞／宮崎駿補作詞／久石譲作曲）などを歌うが、Kの歌声は全て表声である。続けてKは、実践者のピアノ伴奏に合わせて、《カレンダーマーチ》（井出隆夫作詞／福田和禾子作曲）、《ドキドキドン！一年生》（伊藤アキラ作詞／桜井順作曲）、《さよならマーチ》（井出隆夫作詞／越部信義作曲）などを《南の島のハメハメハ大王》と同じ振付けで踊るが、一切歌わない。さらに《いちごケーキ》（宮嶋麻里作詞／清水俊夫作曲）、《春が来た》（高野辰之作詞／岡野貞一作曲）もピアノを弾くようせがむが、実践者のみが歌い、K本人は聴いているだけで歌わない。ふたたび《南の島のハメハメハ大王》を実践者が弾き始めると、Kは窓のそばに行き、外に向かって強い表声で叫ぶように歌い、音程変化はほとんどない。

事例からもわかるように、女児Kは歌ったり、音楽に合わせて踊ったりすることがとても好きなようで、この日以降、実践者が持参した曲集から、自分の歌いたい歌をリクエストするようになる。また、Kはかなり多くの歌を知っているようで、この日も十数曲の歌を歌っているが、Kの裏声が聞かれたのは《こぶたきつねこ》のみである。

【事例13】 2009年12月8日（4歳児クラス）

女児Kのリクエストで《となりのトトロ》（宮崎駿作詞／久石譲作曲）や《あわてんぼうのサンタクロース》（吉岡治作詞／小林亜星作曲）を歌うが、Kは終始表声のみで歌い、音程の変化はあまりない。そのあと《南の島のハメハメハ大王》で、Kはウクレレとピアノを鳴らしながら歌うが、こちらも表声である。次に実践者NがKと《やまびこっこ》を歌うが、裏声バージョンではKが所々裏声で歌うのが聞こえる。その後、《うたえバンバン》、《やぎさんゆうびん》（まどみちお作詞／團伊玖磨作曲）、《いぬのおまわりさん》（佐藤義美作詞／大中恩作曲）、《ドレミの歌》（ペギー葉山作詞／リチャード・ロジャーズ作曲）、《たなばたさま》を歌うが、いずれもKは表声で歌っている。

しばらくして、Kは実践者のピアノ伴奏に合わせて《北風小僧の寒太郎》（井出隆夫作詞／福田和禾子作曲）を歌い始めるが、途中で隣のクラスに行ってしまう。だが、3番の最後の方で戻って来て、「♪ひゅーん」の箇所を裏声で歌う実践者Sと一緒に歌うと、Kも裏声が出ている。歌い終わった後、SがKに「上手」とほめる。

次にNがKと《かえるのぴょんた》（楽譜2）を歌う。Kはほとんど表声で歌うが、一部「♪ピョンピョンピョン／ススススススー」の部分では裏声も出ている。続けて、Kのリクエストで《ふみきり》（楽譜3）を歌うが、これも「♪ふみきりカンカンカン」の箇所など、曲の一部分を裏声で歌っている。その後《こおろぎざん》（楽譜4）を歌うが、これは全て表声であった。さらにKのリクエストで、Nのウクレレ伴奏に合わせ《ロープウェイ》（楽譜6）を歌う。最初はSがKを抱っこして、2回目は肩車をするが、Kはほとんど歌っていない。3回目によりやく少し歌うが表声である。

楽譜2

かえるのびよんた 詩 中村かおり
曲 廣木 良行

mf



楽譜3

ふみきり 詩 石川 きんえつ
曲 廣木 良行

f



楽譜4

こおろぎさん 詩 田辺 幹人
曲 廣木 良行

mp



この日も女兒Kは何曲も実践者にリクエストをし、ピアノやウクレレの伴奏に合わせて歌っているが、ほとんどの曲は表声で歌っている。一方、《やまびこごっこ》や《北風小僧の寒太郎》など裏声を引き出す意図で採り入れている楽曲や、《かえるのびよんた》や《ロープウェイ》など開発した教材の多くは、この時、初めて歌った曲であるにもかかわらず、部分的に裏声で歌っている様子が確認できる。

3.1.3 裏声で歌うことへの意識付け

このように実践者が裏声を引き出すことをねらって用いている楽曲の多くでは、女兒Kは裏声を使って歌唱することができている。事例13の後半で見られるように、Kは実践者Sに抱っこされたり肩車されたりして歌うことを好み、その際に裏声で歌うことがしばしばあった。同様の状況は、次回以降の実践でも見られた。

【事例14】 2009年12月15日（4歳児クラス）

女兒Kが実践者に《スリッパリッパ》（楽譜5）をリクエストする。Kは実践者Sに肩車してもらい、一部一緒に歌う。「♪りっぱなりっぱなスーリッパ」のところでSは屈伸してからジャンプするような動きを付ける。Kは1番は表声で歌っているが、2番の「♪スリッパリッパなスーリッパ」のところで高い裏声が出る。その後、2番の終わり「♪りっぱなりっぱなスーリッパ」のところも裏声で歌う。次にK、《ロープウェイ》をリクエストする。肩車のまま、Sが1番の「♪あおーいあおーい」のところで体を斜め左右に揺らす動きを付けると、「うわーーー」と高い裏声を出す。

続けてKは、Sに肩車されたまま《ふみきり》を歌う。1番は表声で歌うが、2番の「♪ふみきりカンカンカン」のところを裏声で歌う。Sは女兒Mに「ジャンプして」とせがまれ、Kを肩車したまま女兒の手をもってジャンプする。「♪ふみきりカンカンカン」や「♪ロープウェイウェイウェイ！」の部分を歌いながらジャンプすると、Kが高い裏声でなにやら叫ぶ。

K、Sに抱っこされたまま《いぬのおまわりさん》を歌う。「♪ワンワンワワン」のところでSが上に放り投げるような動きを付けると、それに合わせて「♪ワワン」と高い裏声で歌う。歌が終わった後も「もう1回」とリクエストし、「♪ワンワンワワン」の部分だけをSが動きを付けて歌うとまた「♪ワワン」だけを高い裏声で一緒に歌う。K、Sに抱っこされたまま《アイアイ》（相田裕美作詞／宇野誠一郎作曲）を歌う。曲半ばの「♪アイアイ」の部分を高い裏声で歌い、その後のフレーズも部分的に裏声で歌う。

楽譜5

スリッパリッパ

土 生 要 詩
廣 木 良 行 曲

mf



スリッ パリッ パな スー リッ パ かわい いかわい い リボンをつけた
スリッ パリッ パな スー リッ パ はーなやラインの もようをつけた
スリッ パリッ パな スー リッ パ めもさめそーうな いるあいの

だーれがはいても にあいそう リッ パなリッ パな スー リッ パ
ダンスがしたーく なるという たーかいか がこのスー リッ パ
ファッションショーに むいている リッ パなリッ パな スー リッ パ

【事例15】 2010年2月22日（4歳児クラス）

女兒K、実践者Sに肩車されている。Sは何回も《ロープウェイ》を歌っている。そのうち、Kは肩車されたまま、《ロープウェイ》の前半部分を全て裏声で歌っている。

楽譜6

ロープウェイ

詩 悠 木 一 政
曲 廣 木 良 行



ワイ ワイ ワイ ワイ ワーイ ワーイ ワーイ ワーイ
ワイ ワイ ワイ ワイ ワーイ ワーイ ワーイ ワーイ
ひろいひろい ひろいひろい えいっ と とひこえて ワーイ
あらいあらい せらのなが めらゆら ゆれながら ワーイ
であ かい かい じやう に なーったの さ
そらとぶくじらに なーったの さ ワーイ ワーイ

これらの事例でわかるように、この頃になると女兒Kは裏声引き出すことを意図した教材以外の歌でも、肩車されたり、だっこされたりしながらジャンプするなどの動きに合わせて、裏声を出すようになっていく。このように、身体の動きに合わせて裏声を出す活動を繰り返したことで、Kの中で、動きと裏声を使う時の身体感覚が結び付き、裏声を出すことへの意識付けにつながったと考えることができよう。

3.2 考察：裏声を引き出す歌唱教材の効果

3.1の事例9～13で見られるように、既知の童謡・唱歌やアニメソングを歌った時は、子ども達はほとんど表声のみを使用しているのに対し、事例11～15の開発した教材など裏声を引き出すことをねらった楽曲を歌唱した場合は、子どもの裏声がしばしば聞かれた。実際に歌った回数も実践の対象児も少ないものの、このように用いている声に明確な違いが認められることから、教材自体が子どもの声の使い方に影響を及ぼしているということを指摘できよう。

むろん、我々が実践に際して、子どもの裏声を引き出そうというねらいを持っていることで、範唱などに意図が大きく反映されていることを考慮に入れるべきであろう。実際に裏声を引き出すことをねらいとした楽曲や教材では、範唱する実践者も意図的に裏声を使用して歌っており、それが子どもの歌声に影響を及ぼしていると推察される。つまり、我々大人がその楽曲をどういう声で、どのように歌ってもらいたいかという意図が、子どもの声の使い方に大きく作用するということが示唆されるのではないだろうか。

ただし、教材と実践者の範唱のみが、子どもの裏声を引き出された要因となっているのではなく、身体的なはたらきかけや、声への意識付け、そして環境構成などによって、子どもの歌声も大きく左右されると言えよう。例えば事例13や14、また15で見られるように、実践者が子どもを抱っこしたり肩車をしたりしながら、裏声を出すことが想定されている部分で跳躍するなどのはたらきかけが、裏声を引き出す上で効果的だったと思われる。これは、裏声を出す時の身体感覚が、体が宙に浮く感覚と結び付けられることで、裏声を出すことに対する意識化を促すはたらきをしたと考えられる。なお身体感覚へのはたらきかけについては、すでに志民・中村（2009、2010）でも、裏声を引き出す上で効果があることが示唆されている。

つまり、子どもの声の能力を刺激し十分に引き出そうするとき、そういった意図による教材選択が重要であると同時に、声の能力を引き出すという視点からののはたらきかけが不可欠であると言えるのではないか。

まとめと今後の課題

幼稚園で実際に行なった歌唱活動を検討し、子どもの声の技能を引き出し刺激する上で、どのようなはたらきかけが有効であるかということについて検討してきた。

まず遊びの場面での声についての検討からは、子どもが自発的に、また実践者のはたらきかけをきっかけにして裏声を出して表現していることが確認されたが、それを受け止め、模倣して返すなどのやり取りを通して、子ども自身に意識化させることで、より多彩な声の表現に広がっていく可能性が示唆された。

一方、歌唱場面について検討する中で、一般的な童謡やアニメソングなどでは子どもはほぼ表声のみで歌うのに対し、我々が開発した教材および裏声を引き出すことをねらった楽曲では、裏声で歌う事例をいくつも確認することができた。教材の有効性のみならず、我々実践者の

「子どもから多様な声を引き出す」という意図が、そのような子どもの声の能力を刺激し、裏声を出す技能を引き出すに至ったと考えることができる。

また、今回の実践では、比較的年齢の低い3歳児の段階から、音遊びや声遊びを行い、声や音に耳を傾けたり、声や音で遊んだりする経験を重ねることで、そういった活動と歌唱活動とを遊離させることなくつなげていくことができた。遊びの中で子どもが自然に駆使する声の技能を歌唱に活かしていくためには、声を出すことと話すこと、歌うことの境界線が未分化である乳幼児期から、子ども自身が自分や他人の声に気づき、声で表現したり、声で人とやり取りしたりすることの面白さを実感しながら積み重ねていくことが必要であると言える。

そのためには我々大人が子どもの声の能力に気づき、それを刺激し、引き出し、歌唱の技能に結び付けていこうとする視点が不可欠ではないだろうか。そのような子どもの表現能力を正當に評価することのできる感性と、その能力を刺激していける声の技能が、子どもとかわる大人に求められる資質として重要ではないかと考える。

今後、このような大人の側の、子どもの声に対する視点について広く提案を行ないながら、「子どもの声をいかに育てるのか」ということについて議論できる環境をつくっていければと考えている。

註

- 1) 本研究に至る経緯とその過程で得られた成果や仮説については、今川恭子・志民一成「子どもの声と音楽的表現（1）～（9）」（日本保育学会第56～64回大会における発表：大会発表論文集に収録）および、小川・今川（2008）を参照されたい。
- 2) 今川・志民（2004）pp.688-689を一部改変している。
- 3) 本稿において「裏声」と「表声」の用語は、音声生理学において「重い声heavy」と「軽い声light」に分類される2つの区分とほぼ同義として用いている。すなわち、甲状披裂筋等の声帯緊張筋を主に用いる「表声」と、輪状甲状筋等の声帯伸展筋を主に用いる「裏声」の2区分である。
- 4) 「針金電話」はバネの両側にカップを取り付けたものを筒の中に入れたもので、片側のカップに向かって発した声がバネに共鳴し、反対側で聴くとエコーのように声が響いて聞こえるというものである。なお、日本音楽教育学会第39回大会で行なわれた、繁下和雄氏のワークショップ「音をあそぶ・声をあそぶ」で紹介された「糸電話」を参考に製作した。

引用文献

- 今川恭子・志民一成（2004）「子どもの声と音楽的表現（3）かかわり・身体・イメージの視点から」『日本保育学会第57回大会発表論文集』。
- 小川容子・今川恭子（2008）『音楽する子どもをつかまえない ―実験研究者とフィールドワーカーの対話』（ふくろう出版）。
- 志民一成・中村かおり（2009）「幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発 裏声の技能に着目して」『静岡大学教育学部研究報告』。
- 志民一成・中村かおり（2010）「幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発（2）教材を用いた個人指導における成果の総括」『静岡大学教育学部研究報告』。